
隠された真実

クロセ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隠された真実

【Nコード】

N9718K

【作者名】

クロセ

【あらすじ】

あの一連の事件から3ヶ月が経った。

ケロ口達はテララに会いに、ドララ特務兵と共にフランスへ向かう。しかし、久しぶりに会ったシオンはどこか様子がおかしい。

モン・サン＝ミシエルから謎のエネルギー波をキャッチし、ケロ口達は再びモン・サン＝ミシエルへ向かうのだが…

第一話 来訪（前書き）

DS『 超劇場版ケロロ軍曹 撃侵ドラゴンウォリアーズ』の妄想
後日談。ネタバレを含みますので未プレイの方はご注意ください。

第一話 来訪

冷たい木枯らしの吹きすさぶ長い冬も終わりを告げ、温和な空気に包まれて小さな桜の芽が色をつけ始めた、そんな季節。

麗らかな日差し降り注ぐ春の午後、家事を一段落させたケロロはソファの上でうたた寝をしていた。

夏美と冬樹は学校に、秋は仕事に出かけている。

あの数ヶ月前の騒動が嘘のように、日向家にも平穏な日々が訪れていた。

人々から竜のしっぽに関する記憶を消し、記憶操作、後始末と何かと忙しい数ヶ月であったが、そんな忙しい日々も収束を向かえ、ケロロ小隊も元の落ち着きを取り戻している。

ケロロの侵略活動も鳴りを潜めていたため、気をもむ必要がなくて楽だった。と夏美は言う。

そろそろ侵略活動を再会してはどうだ、とギロロも小言を言い始め、『明日から本気出す』とケロロはのらりくらりと場当たりのな言い訳をして逃げていた。

「やっぱりせっかくら大都市制圧したんですし、そのまま地球侵略しちやえは良かったんじゃないですかねえ」

ケロロの隣で、遊びにやってきていたタママがそう言って愚痴を零した。

夏美から許可を貰い、一時的に地球を守る為とはいえ、侵略を成功した都市を手放してしまったのはやはり未練があるのだろう。

「ダミダヨー、タママ君はしたないこと考えちゃ。我輩そんなずる

はしないであります」

タママのぼやきに、ケロロはあくまで自らの拘りを主張する。かといって”ケロロなり”の侵略活動に何の進展がある訳でもなく、いつもと同様に取りたてて何も得るものもないまま本日の侵略会議は終了していた。

タママが小さく呆れたように溜息を漏らす。が、聞かなかったことにした。

「ほう。で、何か次の侵略作戦は考えてるんだろっな」

後ろでガチャリと扉が開き、ギロロが訝しげに眉を吊り上げながらケロロの後ろに立っていた。

心なしか瞳に剣呑な色を宿している。

ケロロは冷や汗を流して後退した。

「いやあ、今はちょっと忙しくってさあ。その内考えるから」

そういつてギロロの機嫌を伺うように一瞥する。

彼は青筋をたて、静かに憤怒の形相を浮かべながら銃の安全装置を外していた。

慌ててケロロが言い加える。

「いや、今っ、今考えるであります!」

黙考する振りをし、タママがやれやれといった様子で顔を背ける。

その時、クルルから通信が入った。

ほっとケロロが小さく安堵の息を吐き、通信を繋げる。

『隊長、伝達が入ったぜー。ドララ特務兵からだ。地球ホコペンに休暇が

てら遊びに来るってよ』

「何ですと?」

「ドララ……って、確か」

ケロロとタママが顔を見合わせる。

ドララ特務兵は数ヶ月前、地球竜を止めるために地球にやっってきた
ケロン軍人だ。ボコペン

いつか前線部隊に配属され、故郷に錦を飾ることが夢だと言っていた。

普段は方言を隠すように敬語で話していたが、気を抜くとすぐ方言が出ていた。

…本人はそれを恥ずかしいと感じていたようだが。

「で、到着はいつであります?」

「今日だ」

「ゲロツ!?!」

クルルの言葉にケロロは飛び上がる。

あまりに急な話だ。

『ククツ、噂をすれば、か。上空に侵入者反応

ケロン軍の宇

宙船だぜ』

「ちよつと、ちよつと、急にも程があるでしょ!?!」

慌てふためくケロロの様子を楽しむようにクルルが笑い声を上げる。
そして、日向家にインターフォンの音が響き渡った。

第一話 来訪（後書き）

5 / 10 1 } 4話を少し書き直しました。

捏造設定がバシバシ入ってます。

初めての連載で不備もあるかと思いますが、ご勘弁くださいませ。
映画の方は見てないので映画の設定とは矛盾点があるかもしれません。

最後までお付き合い頂ければ幸いです。

ドララって誰だよ、という方もいると思うので一応ご説明を。

ドララ特務兵。

ケロン星の片田舎の農家出身。田舎をバカにする都会もんを見返すため、また、前線で活躍して故郷に錦を飾るために、ケロン軍へ入隊。しかし前線の部隊ではなく、辺境の危険生物の監視をする特殊部隊に配属されて不満を持っている。

階級的には「ケロロ」より上位であるが、前線の部隊に憧れを持っているため、「ケロロ」たちに対しては同じ目線、または先輩を見る後輩のような若干下の目線で会話する。

地球竜の力を吸収しケロロ小隊と戦うも、敗北した。

第二話 要求

「作戦遂行中の現場に失礼いたします。

本日は任務ではなく個人としてお邪魔しました」

ドララが綺麗な敬礼を見せ、挨拶を述べる。

「お久しぶりであります、ドララ殿」

ケロロが敬礼を返すと、ドララは顔に添えた手を降ろし、神妙な面持ちで口を開いた。

「：失礼とは存じますが、前回の地球竜の事件のレポートデータについてお聞きしたいことがあって参りました」

「ククツ、やっぱりそうかい」

クルルが小さく喉の奥で笑う。

そういえば、とケロロは思い出す。

レポートからドララ小隊の記録を削除し、ケロロ小隊の活躍によって地球竜の完全孵化は阻止したという内容の報告書をケロロの脚本とクルルの編集によってできるだけ大げさに、嘘という名のアレンジを施してドララに渡したのだった。

そうとは知らず軍に提出したドララは、実際にあったことと全く違う内容が書かれていたことを後から知って驚いたのだろう。

「で、わざわざレポートにけちつけに地球^{ポコペン}まで来たってか？ご苦労なこった」

クククツクとクルルが陰湿な笑い声をたてる。

「ひょっとして、ドララ殿のことばれちゃったでありますか!？」

ケロロがぎょっとしてドララに視線を向ける。

特務兵としての任務に不満があり、前線部隊に強い憧れを持っていたドララは地球竜のエネルギーを吸収し、自らが地球竜となって地球を侵略しようとしたのである。

軍に知られれば軍法会議は免れない。

彼が首を横に振ったのを見てケロロはほっと安堵の息を吐いた。

「なあんだ、バれてないなら良かったであります」

「全然良くないだよ！」

突然のドララの怒鳴り声にケロロは面食らい、目を瞬かせる。

感情的になっていたためか、ドララの口調は方言になっていた。

「オラだって命令違反がどれほどの重罪であるのかは知ってるだよ。他小隊の侵略活動の妨害もだ…！オラは…私は、軍人としてけじめをつけねばならない。

同情など不要だ！除隊か降格か死刑か…、厳罰は免れないでしょうが、覚悟はできています。

私は軍に今回の事件の真相を伝える義務がある。レポートを書き直して頂きたい」

そう言ってドララは強い眼差しを向ける。

「あの…命令違反で死刑になっちゃうのですかあ？」

タママが遠慮がちに声をあげ、ギロロが頷く。

「場合によってはな。それほどの重罪なのだ」

命令違反がどれほど重い罪に問われるかは、ケロロも知っていた。

「ククツ、そりゃ軍人としちゃ立派な心がけツスね。でも何か勘違いしてるんじゃないツスカ、先輩？」

「何？」

クルルの言葉に、苦々しげに片眉を上げる。

「別に俺たちはあんたをかばうつつもりであのレポートを書いたわけじゃないぜえ。あくまで”事実”を元にして書いたただけだ。それとも何か嘘っていう証拠でもあるんスカ？」

「事実？ あのようなでたらめを……」

「でも、証拠はない。そうだろ？ そもそもちゃんと内容を確認せず提出した先輩が悪いんだぜえ。文句があるなら自分達でつくりゃ良かっただろ。持ってたのはあんただ。その時点で文句を言う資格なんてねえんだよ」

「……！」

明け透けなクルルの物言いに、ドララは酸素不足の金魚のように口をぱくぱくパクパクさせ、顔を蒸気させる。

「えーとドララ殿、嘘か本当かは置いておいてあのような報告書にしたのはテララ殿を守るためでもあったのであります。一応孵化を阻止したとはいえ、軍に存在を知られたらどうなるかわからないでありますからな」

テララは地球竜が地球に全エネルギーを返還した時に発生した余剰物質　　いわば、地球竜の生き残りである。

「我輩、今回ドララ殿が来たのはてつきり…その、テララ殿を始末するよう軍から命令をつけたのかと」

「あれは既に地球竜とは別種のもの。卵を産むことも星のエネルギーを吸い尽くすこともない。始末する必要はないでしょう」

「それでも軍は地球竜の正体を黙ってたわけでありまして、都合の悪い存在を消さないとは限らないでありますよ？そもそも我輩今更報告書の書き直しなんてめんどくさいことしたくないし、ガンブラ作るのに忙しいのであります。だから却下」
却下というケロロの言葉に、ドララは呆気にとられたようにその場に立ちすくむ。

「ケロロ、貴様というやつは…っ！」

「じよ、冗談であります！なんつーか我輩侵略活動で忙しいでありますからして、レポートの書き直しはできませんであります。本部から書き直せって命令されたわけじゃないしねー」
書き直して欲しかったら本部を通してネ！と言ってケロロはゲロゲロリ、と笑う。

「ってな訳でドララ殿！」

せっかく地球まで来たんでありますし一緒にテララ殿に会いに行かないでありますか？ついでに地球観光とか」

そう言っつてケロロが白い歯をこぼす。

あまりの屈託のない笑みに、気抜けしたかのようにドララが吐息をこぼした。

どうやら論破できそうにもない、と判断したのだろう。

「…いえ、今日のところはこれで失礼します」

諦めたように肩をすくめる。

「ゲロ？　せっかく来たのにもう帰っちゃうでありますか？　せめてテララ殿にだけでも……」

「私はレポートの件を聞きにきただけです」

そう言っつて立ち去ろうとするドララをクルルが引き止める。

「まあ、待って下さいよ。先輩」

「何です？」

「先輩も一緒にフランスに行った方がいいとおもっぜえ。あんたには聞きたいこともあるしな」

「…？」

ドララが怪訝そうに眉根をよせる。

「ひよっとしたらあんたの任務、まだ終わってないかもしれないぜえ。厳罰撤回のチャンスかもなあ。ていうか、汚名返上？」

そう言っくてクククツクと笑い声をたてるクルルに、その場にいた全員が困惑した表情になった

第三話 疑問

「ねえ、クルルル。そろそろどういうことなのか教えてよー」

「揺らすなよ隊長、気が散るだろ。こっちは操縦してるんだぜえ」
めんどくさそうにクルルルが、椅子を揺さぶりながらせつつくケロロを、あっちへ行け、と手で追い払う。

結局場の雰囲気の流れのまま、ドララもテララに会いにフランスに向かうことになっていた。

ロードランジャーの出来にドララはひそかに舌を巻く。

これほどのものを作る者は軍にもほとんどいない。

技術兵とは元々、情報操作、砲撃観測、伝令の通達など通信兵的な役割が大きく、武器のメンテナンスや簡単な兵器を作れても大掛かりな侵略兵器や輸送機を作る者は少ないのだ。

大抵は購入するか、軍からの支給品であることが多い。

クルルルが最年少で少佐まで上り詰めた天才だと聞いてはいたものの、ウワサ通りの才腕に感心する。

一方で、ケロロが何故前線部隊の隊長であるのか、本当にケロンスターを持った隊長であるのか、ドララはケロロがどういう人物であるのか測りかねていた。

「ケロロ、このガンプラはなんだ！どうしてこんなものを積んでいるっ」

「ゲ〜ロ〜！バレちゃったでありますっ」

（能ある鷹は爪を隠すということなのか…）

しかし、玩具にうつつを抜かし、部下に銃を突きつけられ説教をさ

れている姿に、隊長としての威厳は微塵も感じられない。ふつつつと、心奥から羨望や嫉妬心が沸いてきて、ドララはどす黒い感情を振り払おうと首を振る。

(クルル曹長は厳罰撤回のチャンスだと言っていたが…)

クルルはまだ詳しい事は語ろうとはしない。

他の隊員達も事情がわからず困惑しているようだった。

「クルル曹長、私もどうということなのかそろそろ説明して頂きたいのだが」

意を決してドララが口を開く。

クルルが鼻をほじくっていた手を止め、ちらりと振り返る。

「まあ、詳しいことは着いてからじゃないとわからないんすけどね。フランスに何か巨大なエネルギー反応があるんす」

「エネルギー…?」

ドララが眉をひそめると、クルルが片手でモニタをとんとんと叩く。

「それも日に日にどんどん肥大化してやがる。反応元は恐らく、モン・サン＝ミシエルだな」

その言葉にその場にいた全員がはっとしたように顔を見合わせる。

「ど、どういうことですか!?!」

「それはまだ地球竜が生きてたということでもありますか…!?!」

クルルがさあな、とクツクツクと笑う。

「今の段階では何とも言えねえよ。ただ、このエネルギーは以前にも観測したことがある」

「何?」

「以前俺達が竜にされちまった時、聞こえた唄、覚えてないか?」

「あの、ララールララー、っていう唄でござるか?」

「あれ?ドロロ、いたんでありますか」

「……」

「ああ、その唄だ。その唄が地球竜から発生していた時のエネルギー波と一緒になんだ」

クルルが頷く。

「バカな……！」

ドララが腑に落ちない様子で考え込むように顔に手をあて、天井を睨む。

「地球竜は消滅しただよ、もう地球には危険種はいないはず。オラも本部から何も聞かされてないだよ……」

な、来てよかつたる？ センパイ、とクルルが笑い「地球竜とは限らないぜえ、別の存在の可能性もある」と言った。

「別の存在？ しかし、俺達はその唄を聞いて操られていたわけだろっ？」

「それにその唄ってシオつちが歌ってた唄とおんなじですよ？ そのエネルギー反応、地球竜としか考えられないですけど」

ギロロとタママが首を傾げる。

「そもそも前回の騒動は不可解な点が多いんだよ」

ロードランジャーを自動操縦に切り替え、クルルが椅子ごと体をケロロ達に向ける。

「そもそも竜の書ってのは何なのか。何故ドラグーン家が所有していたのか。どうしてドラゴンウォリアーの資格を持つ者がケロン人だったのか」

ケロロが言葉に詰まったように唸る。

「んー……言われてみれば……」

それだけじゃないぜえ、とクルルが続ける。

「竜のしつぽから流れてきた唄を調べてみたらこいつは一種の洗脳電波の役割があった。以前俺様のマシンをハッキングしたのもコイツだ。でもな」

一度言葉を切り、再びクルルが口を開く。

「過去の事例を調べても洗脳電波を使う宇宙竜なんて聞いたことねえんだよ」

「……！」

全員が息を呑み、その場に沈黙が流れる。

「つまり　そのフランスの巨大なエネルギー体が、前回の地球竜の事件に何らかの形で関わっていた可能性がある、そういうことか？」

静寂の中、ギロロが口火を切る。

「ま、簡単に言やそういうことだな。その水色の先輩なら何か知ってるかもしれないなあ」

そう言つてクルルがドララに視線を向ける。

ドララは質問には答えず、しばらく考えるように顔を伏せた後「事情はわかりました。私も協力します」と言った。

「ククツ、肝心なことは教えちゃくれないかい」

「私とて全てを知ってるわけではない」

「知ってることも話す気はねえってか」

「止すでござる、クルル殿」

ドロロが諫め、へいへい、とクルルが鼻くそほじりを再開する。

「しかし、今回竜の尻尾は地球ポコベンに出現していない。ドラゴンハザードの初期状態も観測されていません。地球竜である可能性は低いでしょう」

「そうかい」

クルルが尻を搔いたまま答える。

元からエネルギー反応が地球竜のものだとは考えていない様子だった。

「な、何だかよくわからないであります、地球竜以外のエネルギー反応だとしたら侵略に使える可能性もあるということあります

な！」

ゲロゲロリ、とケロロが悪巧みをする顔つきになる。

「そういえば、軍曹さん、どうしてフッキーやモモツち達は連れてこなかったですかあ？あの女を留守番に置いてったのはいいと思いますけど、皆で行った方がシオツちも喜びますよ？」

「桃香殿を誘えば冬樹殿もついてくるし、冬樹殿も誘ったらうるさい夏美殿もついてくるに決まってるであります！今日の家事当番さぼれるし、一石二鳥っ。たまには我輩もゆっくり旅行したいであります」

(ドララ殿に地球を観光してもらうのが目的でありまして、今回冬樹殿達は関係ないであります)

「軍曹さん……。隠すべき本音と、建前が逆になってるですう……………」
「ゲロオ！？な、何故っ」

慌てるケロロに、タママが深々と溜息をついた。

第四話 再会

クルルはドラグーン邸から50メートル程はなれたところでロードランジャーを停止させた。

出発する前は柔らかな日差しが降り注ぎ、天高く抜けるような青空が広がっていたが、フランスの空はまだ薄暗く、キラキラと細かい砂のような星が散らばっている。

ロードランジャーから降りると、ケロロは吹き抜ける風に体を震わせた。

「フランスはまだ朝でありますかあ……」

「何だか変な気分ですう」

タママが空を見て違和感を覚えたのか、しきりに首を傾げていた。

「いつ見ても立派なお城でありますな」

雲を突くように広大な敷地に聳え立つドラグーン邸に、ケロロは圧倒され、溜息をつく。

その豪壮な様は家というよりは、お城だ。

「それにしてもドラグーン邸の食事、楽しみでありますなあ。超がつく程豪華でえ、スイーツなんて舌先で蕩けちゃうくらい甘くておいしいんです！」

そう言つて悦に入り、ムフフと笑い声を零す。

「わあい、さすが軍曹さん。考えることが意地汚いですう」

「俺達はおくまで調査に来ただぞ。貴様、忘れてないだろうな……」
ギロロが目を吊り上げ、銃を構える。

「大丈夫だつて！お菓子は300円まで、ガンプラはHGGまで。バナナはお菓子に含まないであります。まさに準備万端！」
そう言つて鼻歌を歌いながら頬を緩ませるケロロに、ギロロは黙つたまま銃の引き金をひいた。

ケロロ達がドラグーン邸に入ると日向家がまるまる容易に入つてしまふ。まいそんな玄関ホールに、数え切れない程の使用人が並んでケロロ達を出迎えていた。

踏むのさえ躊躇つてしまふ程ピカピカに磨き上げられた大理石の床に目を細める。反射光がまぶしい。

きらびやかなシャンデリアから漏れ出る光が、部屋を明るく彩つていた。部屋の隅には高価そうな置物や鎧が優雅に立っている。

「ゲ〜ロ〜」

豪壮な様にケロロがたじろぐ。

来るのは初めてではないが、やはり驚かされるものがある。西澤家とはまた違つた豪華さだ。

日向家とは雲泥の差だ、とそんな失礼なことを考える。

「お久しぶりなのです、ムッシュ・ケロロ」

シオンが歓迎の意を述べると、後ろにいた使用人達が一斉に深く頭を下げた。

「来テクレタ、テララ、嬉シイ！」

シオンの後ろにいたテララが満面の笑みで飛び上がり、ケロロに抱きつく。

頭を撫でると気持ちよさそうに目を細めた。

「おー、テララ殿にシオン殿。お久しぶりでありますな」

「連絡して下さればお迎えに参りましたのに」

シオンが首を傾げ、「今日は桃香ちゃんやムツシュ・冬樹は一緒ではないのですね」と言った。

ケロロが敬礼する。

「突然の訪問で申し訳ないであります。ドララ殿が地球ポコペンに遊びに来たので、観光のついでにシオン殿に会いに来たのであります」

エネルギー体のことは言わなかった。

ケロロ達の後ろのほうで、ドララが居心地の悪そうに目をキョロキョロさせていた。

シオンが、視線をドララに向け微笑む。

「ドララさんも来て下さったんですね。その節はどうもお世話になったのです」

「お、オラは…別に…」

面映ゆそうに視線をそらすドララにクルルがくつくつと楽しそうに笑い声をたてる。

落ち着かない様子でドララが体をそわそわさせた。

「長旅でお疲れでしょう。ゆっくり休んで下さいね。今シェフ達に食事を用意させるのです」

「マジで！？ヤフーッ」

「やったですう」

シオンの言葉にケロロとタママが嬉しそうにはしゃぎ回り、ギロロが呆れ顔で目を閉じる。

クルルが「食事用意してくれんならよ、カレーも頼むぜえ」としっかり注文をつけた。

そんな中、ドロロは緊迫した面持ちでそつとケロロに耳打ちする。

「…隊長殿、拙者はモン・サン＝ミシエル周辺の調査をしてくるでござる」

「え、ドロロも飯くらい食べていけばいいでありますのにー」
驚いたようにケロロが振り返る。

「必要ござらん」

そう言って制止する間もなく、アサシンは跡形も無くその場から消えうせた。

「んもつ、そんなの後でゆっくりやればいいのに…」

「ドロ船先輩の分まで僕頑張つて食べちゃうですう」

ケロロが肩をすくめ、タママが意気こむ。

「…?どうかしましたか?ケロロさん」

「な、何でもないであります。ドロロはちょっと他に用があるみたいで…」

「…そうですね」

シオンが不思議そうに首を捻る。

ひよつとしたら、ドロロがその場からいなくなった事にも気づいていないかもしれない。

「…ところで、その…何か変わったことは無いか?」

ギロロがおもむろに口火を切る。

恐らく謎のエネルギー波についてシオンが何か知っていないか遠まわしに聞いてみたのだろう。

「…変わったこと、ですか?」

シオンが目当惑の色をうかべる。

ケロロには、一瞬彼女が逡巡するように視線を横にそらしたように見えた。

「実は」

シオンが思いつめた表情で口を開く。
しかし。

「何モナイヨ！」

唐突にテララが横から口を挟み、首を振った。

「ソレヨリ、テララト一緒ニ遊ボ？」

そう言つて腕を引っ張つていく。

「おい、やめろ！帽子を引っ張るな！」

ギロ口の悲鳴が尻すぼみになって消えていく。

「…すみません、何でもないのです」

すっかり言葉を言葉を呑み込んでしまつたらしい。

ケロ口達は不思議そうに首を傾けたが、シオンは後ろに居た使用人の方へ歩を進めてしまつていた。

「おい、ちよつと待て」

「…何です？」

クルルの言葉にシオンが振り向く。

「少しの間、竜の書を貸して貰いてえんだ。ちつとばかり調べたいことがあるからよ」

シオンの顔が、強張る。傍目にもわかるくらいに狼狽の色を見せた。視線を中空に泳がせるシオンに、ケロ口は心配そうに声をかける。

「…シオン殿？」

「ごめんなさいなのです、竜の書は今手元に無いのです。それより、ピエールにお部屋へご案内させますね」

「ゲロ？」

そう言つてシオンはピエールの方へ歩いていく。

「クゝクツク、何か隠してんなあ、あの地球人^{ホコベンじん}」
クルルの目が、鋭く眇められた。

第五話 憂慮

目の前に運ばれてきた料理を見て、ケロロは目を輝かせた。見ているだけで心が浮き立つようなご馳走だ。無意識のうちに唾液がわいてきてごくりと生唾を嚥下する。

「すっげー。これ、全部食べていいんですか？」

顔をほころばせ、シオンに嬉々とした表情を向ける。

彼女は口元を緩めて頷いた。

「はい。ケロロさん達のために作ったものですから、遠慮しないで食べてくださいね」

「ゲロー!!!」

「それじゃ、遠慮なく頂くですう」

間髪いれずに嬉々とした表情でお菓子にかぶりつくタママ。ケロロが苦笑する。

「まあまあ。タママ君。まだギロロやテララ殿も来てないわけだし、もう少し待ってようよ」

「待てないですう。僕のこの手が真っ赤に燃える！ お菓子を掴めと轟き叫ぶですうっ」

そう言って近くにあった大きなシュークリームに嚙り付き、「ンマァーイ！ フランス最高ですう」と恍惚の笑みを浮かべ、口の周りに

ついたクリームをぺろりと舐めた。

タママの背後で扉があき、ギロロが食堂に入ってくる。深く溜息をつき、表情には疲労の色を滲ませて。

「やれやれ、ひどい目にあった」

そう言っただけをすくめる。

「何処に行ってたですう？」

タママの問いかけに苦々しげに眉をひそめて。

「あの後、ずっとテララの遊びに付き合ってたんだ。……裏声で人形ごっこ」

恥らうようにギロロが頬を赤らめ視線を逸らし、タママがデザートをぱつと皿の上に吐き出す。

苦しそうにむせ、うっすらと目元に涙を浮かべていた。

「ゲホツ、ゴホツ、ご、伍長さんが!? ゲフーツ」

「ギロロが人形ごっこ!? 何それ、超見たかったんだけど」

ケロロが耐え切れない、といったように吹き出し、腹を抱えて笑い出す。

ドララまで頬をピクピクとさせ笑いをこらえる動作をしているのを見て、ギロロは羞恥で顔を真っ赤に染めた。

顔から蒸気を立ち上らせながら

「ええい、笑うな! 俺だってやりたくてやったわけじゃないっ」

「ゲロオツ、オチケツ!」

手榴弾まで持ち出したのを見て、ケロロは慌てて手を振り、いい加える。

「そ、それよりテララ殿は? まだ姿が見えないでありますか」

「何だ？ まだ来ていなかったのか」

ギロロがふと怪訝そうな顔をして、シオンの表情に影がさす。

「そういえば、心なしか顔色がわるかった。調子でも悪いのかもし
れん」

大丈夫だといいたが、と付け加えギロロは席についた。

「……テララちゃんは、具合が悪いみたいなので休んでいるのです。
ケロロさん達は先に食べててください」

シオンが伏せていた顔をあげ、微笑む。

だが、その笑みはどことなく弱弱しく力がなかった。

「大丈夫なんですか？」

「ええ」

短く頷く。

表情には影が差したままだった。

暫く浮かない顔で逡巡した後「…わたしは、テララちゃんの様子を
見てきますね」

そう言っただけで食堂を出て行った。

「……大丈夫なんですかねえ」

タママとケロロが心配そうに顔を見合わせた。

幕間

ドララは考えあぐねていた。

ケロロ小隊に、自分の持っている情報を話すかどうか。できれば彼等の力を借りずこの件を一人で解決してしまいたかったが、ドララには情報を集める術がない。

自分の持っている情報を話し、ケロロ小隊と協力して事態の解決を測るのが最善のように思われたが、特務兵には軍の極秘情報や軍の過去の過ちを外部に漏らすことのないよう隠蔽し、葬ることが默契にある。

（オラは…、私は、どうするべきだ）

軍の命令に背いた自責の念から一人で解決をはかりたい、という気持ちもあった。

しかし、ドララ小隊の隊員は、此処にはいない。

一人で対処できる規模の問題であるのかどうかすら、わからない。

何の情報もなく飛び込んでいくのは危険と判断し、ドララは未だ身動きできずにいた。

元々ドララは情報収集や情勢分析は得手としていなかった。

ケロロ達が豪勢な料理に舌鼓を打っている中、ドララはそっと食堂を抜け出す。

もしかしたら、何かドロロが情報を得ているかもしれない。

部屋に戻っていないか、様子を見に行くことにしたのだ。

部屋のドアを開け、中を覗く。

しかし。

「ん〜？」

クルルがドララに気づき、振り返る。

ドロロの姿はそこには無く、かわりに陰湿な黄色い参謀の姿がそこにあった。

そういえば、食堂に彼の姿はなかった。

片手にカレーを持ち、何を調べているのか忙しくキーボードに指を走らせている。

部屋を満たす濃密なカレーの香りにドララは顔を顰めた。

「此処で食べていらしたのですか」

「ああ、ああいう賑やかで楽しそうな雰囲気は苦手だね。カレーがまずくなる」

そういつてくつくつと笑い声をたてる。

どうやら、ドロロはまだ戻っていないようだ。

ドララはどうするか迷った後、とりあえずクルルから離れた場所に座ることにした。

「……………」

部屋の中を、奇妙な沈黙が支配する。

あたりがひっそりと静まり返っているせいか、クルルがキーボードに指を走らせるカチャカチャという音がやけに大きく感じられた。ドララは何を調べているのか気になり、ちらりとクルルの様子を見る。

(何を調べてるだあ…?)

時折、「うん」だとか「ほう」だとか呟くクルルが気になって、焦れたように視線を送っているとクルルがドララの視線に気づいたのか「気になるんスか?、先輩」と口角を上げ、此方を振り返った。

「…何を調べているんです?」

「気になるウ?」

クルルが口元を意地悪く歪め、片眉を上げる。

「…ええ」

ドララが頷くと、クルルが「ホントに?」と再び問いかけた。そんな蒞弱問答が何度か続き、辛抱強くドララが頷いていると、今度は顎に手を当て「えー、どうしよっかな」と言いだした。

「…結構です」

ドララは閉口する。

「冗談すよ、センパイ」

クルルがいたずらっぽく笑い、「でも」と言った。

「ギブ&テイクでどうっすか?、俺が何を調べてたか言うかわりに、先輩が一つ俺の質問に答えるっつーのは」

「質問…ですか」

ドララが目を瞬かせ、クルルが頷く。

情報をただで渡す気はない、ということか。

「竜の書は古代ケロン軍が作ったものなんじゃないっすか?」

ドララは目を丸くし、狼狽する。

「な、何故それをつ…!」

驚いて、目を見開く。

言ってから、はっとした。

クルルが意地悪くニヤニヤと笑みを浮かべている。

ドララは嘆息し、眉根を深く寄せて頷いた。

「……ええ、そうです」

動揺してしまった時点で、もう答えなど言ってしまったも同然だ。頭に手をつけてドララは天を仰ぐ。

「クツクツク、やっぱりそうかい」

「…で、何を調べてただあよ？」

無意識のうちに口調が方言に戻っていたが、どうでもよかった。頭を抱えるドララを尻目に、クルルが口元を歪めて言う。

「…インベーダーゲーム」

「は？」

想定外の返答にドララは虚をつかれ、目を見開く。

「地球ボコベンの古いゲームっすよ」

「へ？」

凍りつくドララを尻目にクルルは言葉を続ける。

「この古臭い感じがたまらねえんだよなあ」

そう言つて陰湿な笑い声をたてる。

クルルがキーボードから手を離し、パソコンのモニタをドララにも見えるように移動させた。

モニタには『GAME OVER』の文字が映し出されている。

つまり。

「……！！」

クルルは調べ物などしていなかったのだ。

してやられたとドララが気づき、クルルに抗議の視線を向ける。

「どうせ、一緒に行動してるんだ。いくらでも情報は手に入るだろ
お？勝手に勘違いしたのはセンパイだぜえ」

そういつてクルルは、固まるドララを置いて、カレーを持ったまま
部屋を出ていった。

第六話 消失

食事を終え、案内された部屋に入るなり、ケロロは用意されていたベッドに倒れこんだ。

満腹になった腹を擦りつつ、恍惚の表情を浮かべる。

「いやー、豪勢な食事でありましたなあ」

「見てみて、軍曹さん。ベッドがふつかふかつ。楽しいですう」

ケロロとタママが嬉しそうにはしゃぎながらベッド上で飛び跳ねる。果ては枕投げまで始めた2人にギロロが呆れたように嘆息をついて

「…それにしても、あの地球人。何か様子がおかしかったな」

眉を顰めながら言った。

ギロロの言葉を聞いてタママが枕投げをしていた手を止め、何かを思い出したように視線を天井に向ける。

「確かに、シオツチ元気がなかったですう。竜の書の話をした時、すっごく動揺してましたし」

「何か隠してたみたいでありますな」

口に手を当て、もの思わしげな表情を見せる。

「隊長殿」

ふいに、ケロロの後ろから声がした。

「ゲロ？」

自分を呼ぶ声に呆けた声を出し、後ろを向く。
そこにいたのは。

「おお、ドロロー。随分遅かったでありますなあ。何かわかったで
ありますか?」

ドロロの姿がそこにあった。
どうやら調査から帰ってきたらしい。
心なしか表情は曇っているようにみえる。

「…それが……」

躊躇するような素振りを見せた後、口を開いた。

「どこにも、なかったのござる」

「はい?」

「モン・サン＝ミシエルが、消えていたんでござる」

それはあまりに突拍子もない言葉で。

ケロロは一瞬言葉の意味を理解できずに固まった。

「あつはつは、またまたご冗談を……」
空笑いをして手を振ると、テレビを見ていたタママが焦燥した声を
上げる。

「軍曹さん、テレビ! テレビ見てください!」
慌しくテレビを指差し、口角泡を飛ばす。

「…?」

ケロロが視線を向けると、丁度どこかの街中でアナウンサーが中継をしているところだった。

まくしたてるように早口で何かを喋っている。右上のテロップには大きく『消えた世界遺産』と出ており、思わずケロロは目を疑った。口がだらしなくぼかん、と開かれる。

「どゆこと？」

キツネにつままれたような顔でテレビを凝視する。

「アンチバリアだな」

会話を聞いていたクルルがパソコンのモニタを見て顔を顰めた。

「消えたわけじゃない。隠されてるんだ」

「アンチバリアだと…？ 一体何者が…。敵性宇宙人か！？」

ギロロが焦慮の色を滲ませ、眉根を寄せる。

「一体どこのどいつの仕業かは知らねえが…。厄介な事になっちまったな。…ちとこいつを見てくれ」

クルルがギロロの方へ振り返り、モニタを指差す。

『破壊セヨ。戦イノ犬ヲ野ニ放テ。舞台ハ全世界ダ。踊レ。スベテノ男モ女モ我ノ人形ニ過ギヌ』

「ゲロ？」

モニタに並んだ謎の言葉にケロロが首を傾げる。

「何でありますか、それ？」

「例の竜の尻尾から発生していた唄の電波を解析したんだ。エネルギー体からも同じ電波をキャッチした」

クルルがモニタの画面を切り替える。
難解な記号や古代文字が並べられ、ケロロには何が書いてあるのか
わからない。

クルルがヘッドホンから取り出したギミックをパソコンに繋げると、
聞き覚えのある”あの唄”がパソコンから流れてきた。

「シェイクスピアの引用だな、どうやらこの電波は脳の神経に直接
働きかけ強い催眠状態にし、一時的に思考を操ることができるら
しい。……今はまだ微弱でほとんど影響は無いが、ほっといたらマズ
イことになるぜえ」

「破壊…、人形…どういう意味だ？」

ギロロの問いに、クルルが肩はすくめる。

「さあな、今んところは情報が足りねえ。ただ、『戦いの犬』が地球
竜を指しているんだとしたら」

「たら？」

「地球竜は操られていた可能性がある」

「ゲロオ!?!」

呆気に取られる。

タママやギロロも目を皿のように丸くしていた。

絶句。 啞然。 呆然。

これ等の言葉はこういう時のためにあるのではないかとさえ思う。
ドララも驚きを隠せないようだ。驚き取り外した表情をみせている。

「『踊し。スベテノ男モ女モ我ノ人形ニ過ギヌ』…おそらく、その
電波は星全体を支配してしまう程強力なものになるのではないでし

よるか」

やがて、冷静さを取り戻したのか、ドララが渋面の表情をつくり口火を切った。

「何それ！」

それを聞いたケロロが頬を膨らませて。

「それって侵略されちゃうってこと！？そんなこと許さんであります！」

憤然とした様子で息巻いた。

クルルがくつくつと笑い声をたてる。

「クツクツク、とつと発信元をぶち壊しに行かねえとなあ。…でも、その前に行くところがあるぜえ、隊長」

「ゲロ？」

ケロロが目を瞬かせて。

「どこに？」

呆けた様子で言った。

「決まってんだろ」

クルルがニヤリ、と笑う。

「竜の書を探しに、だよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9718k/>

隠された真実

2010年10月9日13時40分発行